

カル、スバード

郡場寛

瑞西に行李を置いて埃利亞とチェックとを旅行したは一九一九年の暮。維也納では石炭缺乏の爲ホテルで湯に入る事が出来ず、止を得ずデアナバードと云ふ大きな町風呂へ行つたが、人が多いので二時間餘も待たされ、おまけにはいつた湯が漸く體温を越えた位、朝湯に馴れた皮膚には逆もお話にならず、其に懲りてもう行く氣もせず、其からブラーグへ行つても矢張り同じ事、もう二週間餘も湯に入らず、お湯好きの自分には頗閉口せざるを得なかつた。が幸ブラーグから程遠からぬ所にあの有名なカル、ス温泉があるので見物かたゝ入浴を企てた次第である。

カル、スバードはブラーグの西方鐵路百八十七キロで獨逸ザクセンの國境に近い。エルベの支流エーゲル河の再支流テーブル川の注ぎ口から一寸はいつた谷間に在り、人口一萬七千の美しい温泉町である。テーブル川は谷間の平野や絶壁の間を幾回も迂廻して居り、大小の建物が其兩岸に高く又低く立ちならび、其周圍には樅や山毛櫸の森がこんもり繁つて居る。(附圖参照)

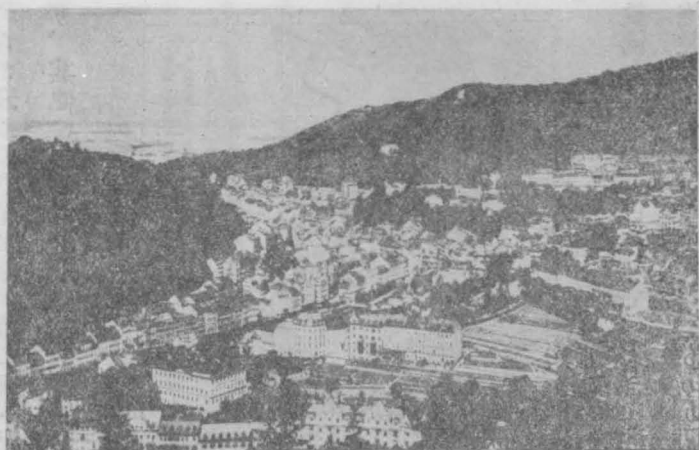
温泉は川の兩岸に沿ひ十六ヶ所から湧き出して居る。一番有名なのはヘプルーデルと云ひ、溫度

カル、ス溫泉は浴療の外に飲療としても盛に用ひられ、殊に消化器系統の治療に重用せられて居る。小さなコップに二杯乃至六杯朝夕飲用するのである。

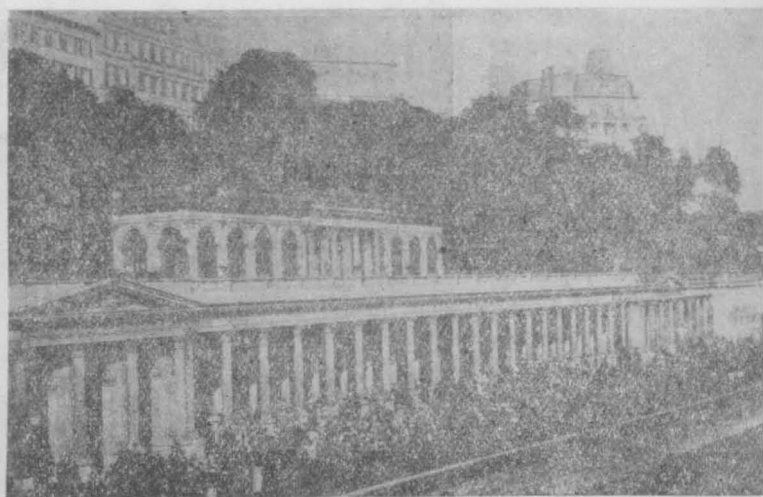
浴客の多い季節には數ヶ所の湯呑場は朝の五時頃から湯呑客の長い行列が出来、十五分もかゝらなければ自分の番が来ないさうだ。其群集を入れる爲めにミユールブルンネンやスプルーデルには大きな柱廊の建物が立つて居るのである。

湯治の季節は四月十五日から十月十一日まで、主なる浴場は此季節以外には閉ぢる。毎年の浴客は平均七萬人以上、其他に旅行見物の客も澤山ある。ホテルの大きいのも澤山あり下宿屋や素人屋も多いさうだ。それで此等浴客に對する慰安の設備も遺憾なく備へられて居る。

附近の山や谷は路が到る所に通じ、林間の逍遙、高所からの展望、溪流の探勝、公園の散策等思ふがまゝに出来る。町には奏樂堂、劇場、舞踏場や良いレストランも澤山ある。尙ケーブルカーで山へも登られる。



カールスバード全景



カールスバードのユルプレンネルン

(客用飲泉温は衆群)

又此鑛泉の天產品、加工品、温泉發達の史的材料等を陳列した博物館もある。尙各地の美術品やボヘミヤ硝子細工などの店もあり、鑛泉の瓶詰カル、ス塩や其加工品も種々賣られて居る。特に面白く思つたのはカル、ス煎餅である。歐洲で煎餅様のお菓子は遂見た事はないが、此所では立派な日本流而かも日本の所謂カル、ス煎餅よりは遙かに風味の良いのを作つて居る店もある。

此温泉は十三世紀の頃から利用せられたさうだがカール四世(一三四七—七八)が鹿を追ふて發見したと云ふ所謂口碑の下にカル、ス温泉と呼ばれて居るのである。其後歐洲の王様や歴史上有名な人々は大低茲に来て居り、ゲーテなどは十三回も湯治に來たさうだ。ゲーテの名の附いて街や記念像もある。

僕が茲へ來たのは十二月の十三日湯治の季節は過



カールスル泉湯出場

つた静かな林の薄雪を踏みながら案内者と二人逍遙した時の氣分精巧な硝子細工の陳列された店、カル、ス煎餅の味などは未だに深い印象を残して居る。

ぎ、それに戦後の影響もあつたか案外浴客は少く、寧ひつそりした氣分であつた。ブラーグの外人局からの紹介で僕を良く案内してくれた人があつたので、一泊の旅行ではあつたが案内良く見物する事が出来た。茲に着いた晩に先づ久振でホテルの熱い湯にはいつた事、ノエバードの西洋式な湯治の経験、テール川を登